牛田智大 ピアノ・リサイタル

Tomoharu Ushida Piano Recital

©Ariga Terasawa

2023年3月16日（木）午後7時開演 東京オペラシティ コンサートホール

7:00p.m., Thursday, March 16, 2023 at Tokyo Opera City Concert Hall

主催：ジャパン・アーツ　協力：ユニバーサル ミュージック

25th Anniversary
Tokyo Opera City
Concert Hall / Recital Hall

ごあいさつ

©Ariga Terasawa

本日は公演に足をお運びくださりありがとうございます。

今回のプログラムはドイツ・オーストリアの作曲家の若い時期の作品を中心に構成しています。公演の中心にはブラームスが20歳で完成させたソナタ第3番を選びました。彼がはじめての交響曲を43歳で発表するまでに十数年間にわたる慎重な推敲が重ねられたことはよく知られていますが、このソナタにはその前段階といえる交響曲に繋がるアイデアがすでに数多く取り入れられています。私と同年代あるいは年下であった作曲家が、20代初めにもかかわらずこれほどの壮大な構想を確立していたことに畏敬の念を抱かずにはいられません。皆さまにもお楽しみいただけることを願っています。

牛田智大

Tomoharu Ushida

プログラム

シューベルト：アレグレット ハ短調 D 915
Schubert: Allegretto in C minor, D 915

シューベルト：ピアノ・ソナタ 第13番 イ長調 D 664 Op.120
Schubert: Piano Sonata No.13 in A Major, D664 Op.120

第1楽章：アレグロ・モデラート	1st Mov. : Allegro moderato
第2楽章：アンダンテ	2nd Mov. : Andante
第3楽章：アレグロ	3rd Mov. : Allegro

シューマン：ピアノ・ソナタ 第1番 嬰ヘ短調 Op.11
Schumann: Piano Sonata No.1 in F-sharp Minor, Op.11

第1楽章：ウン・ポコ・アダージョ	1st Mov. : Introduzione: Un poco adagio
第2楽章「アリア」：センツァ・パッショーネ・マ・エスプレッシーヴォ	2nd Mov. : Aria: Senza passione, ma espressivo
第3楽章「スケルツォと間奏曲」：アレグリッシモ	3rd Mov. : Scherzo e Intermezzo: Allegrissimo
第4楽章：アレグロ・ウン・ポコ・マエストーソ	4th Mov. : Allegro un poco maestoso

ブラームス：ピアノ・ソナタ 第3番 ヘ短調 Op.5
Brahms: Piano Sonata No.3 in F Minor, Op.5

第1楽章：アレグロ・マエストーソ	1st Mov. : Allegro maestoso
第2楽章：アンダンテ・エスプレッシーヴォ	2nd Mov. : Andante espressivo
第3楽章「スケルツォ」：アレグロ・エネルジコ	3rd Mov. : Scherzo: Allegro energico
第4楽章：アンダンテ・モルト	4th Mov. : Andante molto
第5楽章：アレグロ・モデラート・マ・ルバート	5th Mov. : Allegro moderato, ma rubato

©Ariga Terasawa

中野春花（音楽学）

シューベルト：アレグレット ハ短調 D915

シューベルトがこの世を去ったのは1828年11月であるが、本作はその一年半前に当たる1827年4月26日に書かれた。自筆の譜面には「わが親愛なる友人ヴァルヒャーの想い出に」という献辞が記されている。メランコリックなこの小品を贈られた官吏ヴァルヒャーが、仲間に惜しまれながら赴任先のヴェネツィアへ旅立ったのは5月4日のことだ。作品は分散和音による主題にはじまり、寂しげな旋律がヴェネツィアの水面に揺れる。時に暗鬱に、時に光を帯びて短調と長調の間を漂うその曲想には、絶妙な転調技法によって音楽にそこはかとない叙情を与えることに長けたシューベルトの技量を確認できるだろう。一方、古典派の様式とは一線を画す自由な書法で、溢れる情緒的な世界を閉じ込めた小品の姿には、先代に根付いた形式を重視する趣向よりも、以後の作曲家たちが展開するロマン的な美的価値観を感じられる。

シューベルト：ピアノ・ソナタ 第13番 イ長調 D664 Op.120

本作品の作曲年代は1819年と1825年の説で揺れている。いずれにせよ未完に終わった《ピアノ・ソナタ第10番》《第11番》《第12番》での模索の末に唯一完成されたこのソナタを、シューベルトは旅先で知り合った声楽とピアノに秀でた18歳の少女へ捧げた。モーツァルトやベートーヴェンの古典的な様式を受け継ぎながらも、自分だけの音楽を模索する20代の青年作曲家の瑞々しい姿がここにある。

第1楽章：アレグロ・モデラート イ長調 4/4拍子

「言葉を失うくらい美しい場所」と手紙で形容した町、シュタイヤーで過ごした伸びやかな時間を感じさせるナンバー。

第2楽章：アンダンテ ニ長調 3/4拍子

和声的な主題を中心に微妙な陰影を生み出していく、郷愁や憧憬を感じさせる楽章。

第3楽章：アレグロ イ長調 6/8拍子

爽やかな第1主題と、牧歌的な第2主題が対照的に提示される。

シューマン：ピアノ・ソナタ 第1番 嬰ヘ短調 Op.11

1835年に完成された本作はクララに献呈されている。クララは父からシューマンとの交際を妨害され、一度は別れを承知した。しかし1837年8月、彼女は自身のリサイタルで本作品を演奏し彼に応え、8月14日に結婚を承諾する。

第1楽章：ウン・ポコ・アダージョ 嬰ヘ短調 3/4拍子

1832年作曲の《アレグロ・ファンタンゴ》を改作した主題が現れる。左手の跳躍モチーフはクララ作曲の《幻想的情景―亡霊たちの踊り》から借用された。

第2楽章「アリア」：センツァ・パッショーネ・マ・エスプレッシーヴォ イ長調 3/4拍子

自作の歌曲《アンナに寄せて》の主題を用いた夢見心地な楽章。歌詞内容は、戦場で死に直面した男が故郷と愛しい人へ想いを馳せるというもの。

第3楽章「スケルツォと間奏曲」：アレグリッシモ 嬰ヘ短調 3/4拍子

即興的な楽句や突然の場面転換は驚きとアイロニーに満ち、レチタティーボ風の間奏部分はオペラや演劇を彷彿とさせる。

第4楽章：アレグロ・ウン・ポコ・マエストーソ 嬰ヘ短調 3/4拍子

楽章を支配するリズム形の中で楽句が様々な調で繰り返され、まるで万華鏡を覗くような、はたまたもう一つの並行世界を垣間見るような仕掛けになっている。このような複眼的視点は文学的手法からヒントを得たのだろうか。

ブラームス：ピアノ・ソナタ 第3番 ヘ短調 Op.5

本作品は1853年10月に書き上げられた。第3楽章を中心に、第2・第4楽章が詩を掲げ対になる様子は何らかの文学的プロットを感じさせる。すなわちこのような全5楽章という拡大された形式を、20歳のブラームスは物語を描くための手段として意図的に採用したのだろう。

第1楽章：アレグロ・マエストーソ ヘ短調 3/4拍子

シューマンは「（ブラームスのソナタは）ソナタを装う交響曲である」と感嘆したが、確かにこの楽章に感じられる重厚さは管弦楽を思わせる。

第2楽章：アンダンテ・エスプレッシーヴォ 変イ長調 2/4拍子

シュテルナウ（詩人1823－1862）の「若き恋」が冒頭に掲げられている（大意：黄昏はせまり　月は光り輝く　愛し合う二人の心は結ばれ　至福の抱擁を交わし合う）。

第3楽章「スケルツォ」：アレグロ・エネルジコ ヘ短調 3/4拍子

メンデルスゾーン《ピアノ三重奏曲第2番》の主題を借用していることから、ブラームスが先人の作品を研究していた痕跡をここに認められる。

第4楽章：アンダンテ・モルト 変ロ短調 2/4拍子

シュテルナウの詩の題名に由来する「回顧」という副題が付された楽章。

第5楽章：アレグロ・モデラート・マ・ルバート ヘ短調 6/8拍子

第1副主題は第1楽章の第1主題と音進行を共有しており、すなわち第1楽章と第5楽章は有機的に結びつきこのソナタの外郭をしっかりと固めている。

©Ariga Terasawa

ともはる
牛田智大
（ピアノ）

Tomoharu Ushida

2018年第10回浜松国際ピアノコンクールにて第2位、併せてワルシャワ市長賞、聴衆賞を受賞。2019年第29回出光音楽賞受賞。

1999年福島県いわき市生まれ。6歳まで上海で育つ。
2012年2月（12歳）、第16回浜松国際ピアノアカデミー・コンクールにて最年少1位受賞。以降、本格的に演奏活動を始める。
2012年3月、クラシックの日本人ピアニストとして最年少12歳でユニバーサル ミュージックよりCDデビュー。最新CDは自身初のライブ録音となる「ショパン・リサイタル2022」。リリースしたCDは、2015年発売の「愛の喜び」以降、続けてレコード芸術特選盤に選ばれている。

シュテファン・ヴラダー指揮ウィーン室内管弦楽団（2014年）、ミハイル・プレトニョフ指揮ロシア・ナショナル管弦楽団（2015年／2018年）、小林研一郎指揮ハンガリー国立フィルハーモニー管弦楽団（2016年）、ヤツェク・カスプシク指揮ワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団（2018年）各日本公演のソリストを務めるなど、全国各地の演奏会で活躍。その音楽性を高く評価され、2019年5月プレトニョフ指揮ロシア・ナショナル管モスクワ公演、8月にワルシャワ、10月にはブリュッセルでのリサイタルに招かれた。

今までにNHK総合テレビ「プロフェッショナル 仕事の流儀」ほか様々な番組や媒体でその活動が紹介されている。

20歳を記念し2020年8月31日には東京・サントリーホールでソロリサイタルを行い、大成功を収めた。また2022年3月、デビュー10周年を迎えて開催した記念リサイタルは各地で好評を博した。人気実力とも、若手を代表するピアニストの一人として注目を集めている。